

訪探里ふる

摩陸上水ノ文

英彦山大騒動

(桑野家文書・方城町史資料から)

文久三年（一八六三）十一月九日、私は（英彦山警戒の）交代に参りましたところ、昨日の夕方、浪人体の者が六十人ばかり登山したという話を下今任で聞きました。もっとも添田九右衛門殿（大庄屋）

からの飛脚は道で会いました。

それから私は、当村の瀬三郎と治右衛門の兩人を連れて中村千左衛門殿方へ立ち寄りしましたが、すでに登山したあとで、直接、添田九右衛門殿方へ寄り話を聞きましたところ、京徳坊という役僧から知らせて来たが確かなことを見届けるまでは、小倉表へ申し上げる事はいかかなものかと思われると、御郡様（地方行政の責任者で家老級）の名代の田中作衛門様が申されたということである。もっとも田川郡の農兵（富裕な農家の子弟を集めて、主として後方勤務をする）は残らず駆けつけるよう申しつけたということでした。同家にはすでに近郷から駆けつけた農兵もいました。

と、上野手永から来た上野昌左衛門がたった今英彦山から引き取って来たばかりで、その話を聞くと、年が六十才ばかりの浪人がひとり登ったという言葉の聞き間違いで、言語道断の大騒動で恐れ入った話でした。それから我等三人は、同村の仁市郎と申す者の家へ泊まり、翌朝、店屋坂の新七という者方へ三人連れで行き交代しました。十一月十日夜泊まり、十一日夜落合の仙道の固めに行くようにと又々飛脚が来たので杉馬場の方に山越えで行きましたが、これは大変難儀な路で、雪は積るし松明は消えるし、山々谷々を越えてようやく人家に取り付き案内を得て仙道へ着いたところ、又々汐井川の固めに行くようにと宮崎甚三郎が言ってきたので、私も立腹して甚三郎を叱りつけました。

動、英彦山にお登りになり、直ちに大坊（主だった坊）ばかり召し捕りその夜小倉の方へ送られました。大将も御滞陣、自分たちも固めにつきました。大砲三丁そのほか騎馬も来て郡中が上を下への大騒動をしました。

当時は国中が、勤皇か佐幕か、開国か攘夷かで大騒動のときで、小倉藩は佐幕、英彦山は勤皇方としてひそかに活動していたので、藩は英彦山の動きを警戒していましたが、この際その動きを封殺しようとしたものでしょう。

このとき捕まった人たちは小倉八百屋町の牢に入れられましたが、小倉藩が長州軍に攻められ、慶応二年（一八六六）八月城を焼いて香春に退却する際斬首され、その墓は「英彦山義僧の墓」として英彦山神宮参道の向かって左側に祭られています。

*筆者は庄屋歴任、桑野庄三郎

訪探里ふる

文／水上薩摩

四月の「英彦山大騒動」は紙面の都合で説明が不十分でしたので少し補足させていただきます。

○「英彦山大騒動」は当時伊方村の桑野庄三郎の「至要記録」の中の記事「彦山浪人征伐」を読みやすいように現代風に書き直したものです。冒頭の「私は」とあるのは

は桑野氏のことです。

○彦山僧の逮捕 文久三年十一月十一日小倉藩に捕らえられた僧は六人、その時うまく逃れたが後日捕らられ牢に入れられた僧もいました。入牢中病気で亡くなった僧もおりました。

慶応二年、小倉藩と長州藩が戦いとなり、小倉藩は長州軍に攻め込まれ、城を焼いて田川郡に後退するとき、彦山の僧たちは上司の命令で斬首ということで、牢役人によって次々に、牢から引き出されて斬られました。そのとき、城が焼けるのを見た牢役人が慌てて逃げ出し残りの二人は運よく助かりました。

英彦山では小倉の牢で亡くなった八人のほかに京阪の間で王事に奔走中に捕らえられた二人と蛤御門の戦い（禁門の変）で戦死した一人とともに殉難義僧として祀られています。

○農兵 幕末、天下の大変革が予想され藩当局が従来の武士の力だけでは不足となったため、農兵制度をつくったもので、富裕な農家や商家の者から募集しました。無給で武器その他必要なものは自弁で、勤め上げたら苗字帯刀（脇差）を許されます。本務は後方勤務でしたが勇敢に働いた部隊もあったそうです。下赤村の帆足家文書では部隊は十人が一組で編成され、そのうちの一人が「小頭」として行動していたようです。赤・伊田方面は三番手、添田・川崎方面は七番手、九番手は香春・金田方面の人たちで編成されていたようです。

また小荷駄（軍需物資）の警護にあたっていた大庄屋のうち添田儀八郎の名も記されています。しかしこの記録の書かれた時期は慶応二年で英彦山大騒動の時期から約三年ほど後の事です。多少編成

の仕方も変わっていたかも知れません。



◀英彦山神宮の下にある義僧の墓

今月号を持ちまして「添田界隈事件帳」を終了させていただきます。来月号からは、また新しい企画でお話をしたいと思えます。

ふる里探訪

文/水上薩摩

英彦山

神話と伝説の山(一)

添田町の奥座敷とも呼ばれ、その自然の雄大さと四季の美しさ、国指定重要文化財の奉幣殿や銅華

表(銅の鳥居)をはじめ多くの宗教建造物、神話と伝説を持つたくくしたちのほごりの英彦山です。しかし町内の皆さんにもっとお知らせしたいことがあります。

幸い地元の方から『幕末秘史英彦山殉難録』と題する書物をお貸ししていただきましたので、それを基本にして英彦山の歴史的なことやそのほかのことを書かせていただきます。

英彦山は昔から神山といわれています。もちろん、山が美しいからというだけではありません。昔から民族信仰として山には山の神様がおり、川には川の神様がおり、田圃の忙しいときは、田の神として豊作を願うお百姓を守って、無事、収穫が終わったら山に帰られるというお話はよく聞かれます。

英彦山にはそのような民族信仰に基づく土地の神様もおります

が、英彦山がとくに神山として崇められるのは日本の建国につながる神様・天照大神の御子の、天忍穂耳尊(あめのおしほみのみこと)をお祀りしているからです。天忍穂耳尊のフルネームは正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊(まさかあかつかつはやひあめのおしほみのみこと)と申されます。また吾勝尊と申すこともあります。

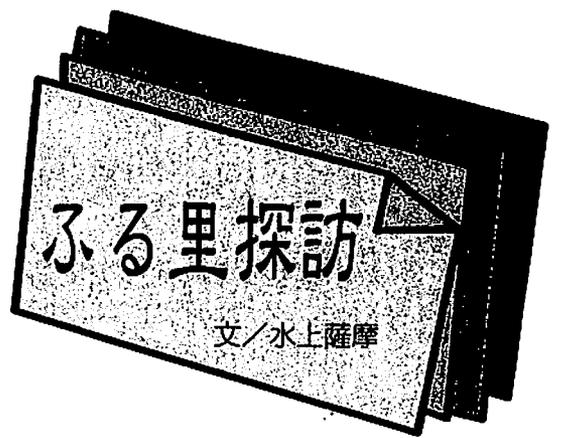
天忍穂耳尊がなぜ英彦山に御鎮座なされたのかと申しますと天照大神が御孫の瓊杵尊(天忍穂耳尊の御子)が、九州日向の国の高千穂の峰にお降りになられることから、ご自分もこの地にお降りになり御子をお見守りしようとお考えになつたのです。

英彦山の山の由来を申しますと、天忍穂耳尊は日の神である

天照大神の御子、すなわち日子を祀る山であるから日子山と呼ばれていましたが、後、彦山と呼ぶようになり、さらに英の一字を冠して英彦山と書くようになりました。しかし称え方はそのまま「ひこさん」と呼びます。(ときには「えひこ」と呼ぶ場合もあります)。

なお、申しますと、天忍穂耳尊の義理のお姉君(瓊杵尊の伯母君に当る)の御三方の女神様が瓊杵尊がお降りになる道中安全をお守りされました。

御三方は沖の島と大島と現在の宗像大社のあたりにご鎮座されてお守りなされ、後、それぞれの御地で祀られていましたが、今は御三神とも宗像大社に祀られています。宗像の神様は神話の時代から交通安全の神様だったのでね。英彦山の中宮にも宗像の神様が祀られています。



英彦山

神話と伝説の山(二)

英彦山は皆さんご承知のように三つの峰からなっています。奉幣殿から上宮までは急な坂道ですが、約二・三キロあります。ここが中

岳です。すぐ右側に見えるのが南岳、左側に少し離れて見えるのが北岳です。三岳とも標高はほぼ同じで約二二〇メートル、県内で最高です。

この三つの山頂のそれぞれに神様が祀られています。英彦山は三つの岳を合わせて一つの山と考え、山そのものを神体として考えています。山を神体とする考えは各地にもあります。

北岳に天忍穂耳尊(あめののおしほみみのみこと)、中岳に伊邪那美尊(いざなみのみこと)(女神)、南岳に伊邪那岐尊(いざなぎのみこと)(男神)が祀られています。中岳・南岳の二神は天忍穂耳尊の御祖母君にあたります。

中岳の社殿は西向きに前後二棟が並行しています。山上は霧がかかることが多いので社殿に霧困いの扉が設けられています。明治維新までは神仏混淆の時代

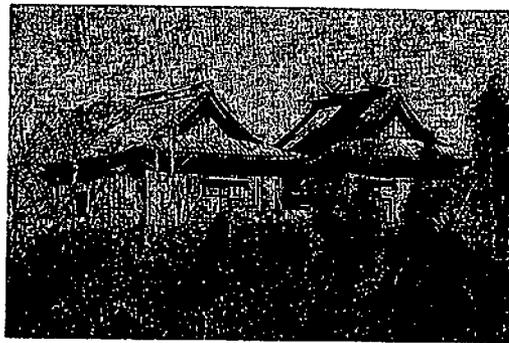
でしたので、仏様も祀られていました。北岳は阿弥陀如来、中岳は千手観音菩薩、南岳は釈迦如来をお祀りしていましたので、上宮して北岳で天忍穂耳尊にお参りすれば阿弥陀如来もお参りしたことになり、中岳で伊邪那美尊(女神)にお参りすれば、同時に千手観音菩薩に、南岳の伊邪那岐尊(男神)にお参りすれば釈迦如来に、お参りしたことになっていました。

明治維新になって「神仏を同体」に考えたり、同じ場所でお祭りすることに「神仏分離令」ということになりました。

このとき、英彦山では神道の方をとるようになりました。仏法を廃することになり、数多くの仏像・仏具・経巻、そのほか仏教に関するものはすべて毀すか、他所へ移すかのほかありません。この時多くの文化財が失われたのは今から思えば誠に残念なことですが、

当時としてはやむを得なかったことです。僧職の人たちはみな神職になりました。

現在、国指定重要文化財となっている奉幣殿は、昔は講堂(僧たちが祭礼する場所)だったのでお参りすれば、山頂まで登らなくてもすむので、高齢の方たちにはありがたいことです。



▲中岳に鎮座する社殿



英彦山への

仏教伝来はいつごろか

日本に仏教が伝来したのは欽明(きんめい)天皇の十三年(日本暦Ⅱ一三二二年)西暦五百五十二年とされてい

ましたが、近ごろは五百三十八年が正しいとされています。そのころ朝鮮半島の南部にあった百濟(くだら)の聖明王が、欽明天皇に仏像と経論を献納したということです。ところが英彦山にはそれより少し早い時期に北魏の善正という僧がやってきて窟(くも)に籠(こも)って修業していたのです。

この僧ははじめは博多の地で布教しようとしたが、そのあたりは仏教に心を寄せる人々がいなくて「未だ仏種芽生えず」と、いうことでした。ところがある夜、南方に一点の光を見て、それに導かれてやってきた所が英彦山でした。その年が教到(きょうたう)のころといわれています。(教到という年号は歴史的には「私年号」といわれているものの一つで安閑(あんかん)天皇のころです。私年号については、あとで述べます)。

このころ日田の藤山村に、恒雄(こうゆう)

という獵師(りやうし)がいて英彦山にもやってきて獵(り)をしていました。ときには善正のところへよって、言葉は通じないながらも善正から「弓矢(ゆみや)を捨てよ」ぐらいのことはささされ、おおよその意味はわかるようになっていました。

ある日、恒雄は英彦山にやってきました。その日はどうしてか日ごろのように獲物がなく残念に思っているとき、ひよっこりと一頭の白鹿(しろか)が現れました。恒雄はその白鹿を射とめました。ところが不思議なことに高い空から三羽の鷹(たか)が舞い降りてきて、一羽の鷹は鹿(か)に突き刺さっている矢(や)を嘴(くちばし)でくわえて拔きました。次の一羽は翼(よく)をのべて傷口をきれいに拭きました。最後の一羽は檜(ひのき)の小枝(こえだ)に谷川の水を含ませくわえてきて付れた鹿の口に注ぎました。と不思議なことに白鹿はたちまち生き返って山の方へ走り去りました。

この不思議なできごとに驚いた恒雄は善正の修業している洞窟(どうくつ)に走つていき、弓矢を折つて仏道修業に入ったということです。

これが彦山(ひこやま)仏教の始まりと考えられます。しかし、また善正がはじめと考えることもできます。

鷹は英彦山(ひこやま)神宮(じんみやう)の象徴(しやうてい)です。資料館(しりあつたん)の入り口の衝立(せんり)に三羽の鷹(たか)が刻まれ入館者(にりくわんしや)を見守っています。

ちなみに熊野(くまの)や那智(なち)は鳥(とり)、宇佐(うす)八幡宮(やっぴんみやう)は鳩(はと)です。

(私年号) 仏教関係のものに多く用いられて残っているそうです。縁起(えんぎ)のよい字(じ)を用いて定められ、たくさんありますが使用された期間は短く、時代的にも地域的にもまちまちでした。白雉(はくち)のころに白鳳(はくほう)、朱鳥(しゆてう)のころに朱雀(しゆかく)はよく知られています。教到(きょうたう)という年号はまだ年号(ねんごう)の制(せい)のなかったころです。たぶん中世(ちゆうせい)のころ創(つく)られたものでしょう。(参考「彦山録起」)



英彦山の

仏教と修験道の始め

前号で述べましたように、日田藤山村の獵師恒雄は、自分が射止めた白鹿が三羽の鷹の助けによって再び生き返るといふ不思議さにくたれて仏道に入り修行し、忍辱

上人と呼ばれるようになりました。同じころ、法運という僧が医術にたいへん優れて多くの人々を救っていることが朝廷に聞こえ、その褒美として、豊前国の野を四十町も天皇から賜りました。大宝三年(七〇一)のことです。(続日本記)その野は今のどこかはわかりません。

このころよりちよつと前の大宝元年に、役小角(えんのおづぬ)が彦山にやってきたということですが。そして、四年後の慶雲二年にまたやつきて彦山の峰を開き修験道を伝えたということです。役小角はそのころ、大和の葛城山(かつらぎさん)に二人の童子をしたがえて住んでいて仙人のような不思議な能力を持っていましたが、韓国広足(からくにのひろたり)という自分の弟子の為に中傷され、天皇の命令で役人たちが変幻自在

の小角を捕らえようとしたが、どうしても捕まえることができない。そこで役人は考え、小角の母親を捕まえて牢に入れたのでようやく捕まえることができたそうです。

小角は、伊豆の島に流されましたが、昼間はじつとしていて夜になると超能力を発揮して島を脱け出し、富士山の頂上に座って居たりしていたそうです。

こういうことから小角は、修験道の祖とされ行場によく小角の像が祀られています。

またこのころ、権現の靈が現れ給い、以来、彦山の靈験は九州にあまねく及び、信仰はますます高まりました。

弘仁十年(八一九)、嵯峨天皇の詔(みことり)により、「日子」の二字が「彦」に改められました。(彦山権現靈験記より)

元弘三年(一一三三)後伏見天

皇第六皇子助有法親王が彦山神宮の大宮司兼務座主となられました。(いままでの輪番座主の制度は廃されました)

皇室との御縁ができましたが、これが五百年のちの幕末、全国が勤皇が佐幕かるとき、佐幕派の小倉藩のうちにありながら彦山の民心を勤皇に走らせたいろいろな事情のうちの一つとも思われなくもありません。

座主舜有のとき跡継ぎがなく、天正七年、秋月種實の三男・竹千代を養子とする盟約を交わしました。これで、秀吉の九州進攻で、岩石城(秋月の出城)が落ちたとき、彦山の僧たちは秀吉の宥しを乞い、座主舜有は肥後国南関まで秀吉に会いに行かなければならなかったのです。七里四方の神領も没収されました。刀狩りもありました。

訪探里ふる

文/水上薩摩

靈験あらたかな彦山

◎嘉保元年(一〇九四)三月彦山衆徒が大挙して大宰府へ押しかけました。どんな要求かは不明ですがその勢いは大したもので、その時の大宰府のトップは、大宰大式(ださいのだいに)藤原長房とい

う人でした。この人は彦山衆徒の勢いに恐れをなして都へ逃げ帰りそのまま辞職してしまいました。

当時の大宰府は「遠の朝廷」とおのみかどとも呼ばれ、九州全域を管轄する役所であり、大宰府の長官は大宰師(ださいのそつ)と呼ばれ、皇族か高位の役人が任命されますが欠員のときもありました。ちょうどこの頃は都でも有名寺院に属していた衆徒が集団で強訴をすることが起こり始めていました。この年の前年に興福寺、翌年には延暦寺の衆徒たちが強訴、それを排除しようとした部隊の責任者は衆徒側から重刑を要求されそれぞれ遠島になり、排除の指示をした関白藤原師通は呪詛(じゆそ)されたということでした。大宰府から都に逃げ帰った藤原長房もいちがいに弱腰役人とはいえないですね。それにしても彦山の勢いは大したものであったんですね。

◎後白河天皇が法皇の頃か?民間の人たちがよく口にする歌(今様)をたいへん好まれ、それを集大成して二十巻もある「梁塵秘抄」という本を著されました。歌詞が十巻、歌い方などが十巻だろうということですが、たいへん古い書き物で原本は部分的にしか残っていないそうです。ところがその現存している部分に、なんと彦山のことがたった一言ですが書かれているのです。

√筑紫の靈験所は、大山四天王清水寺、武蔵清瀧、豊前の企救の御堂な、籠門(かごかど)の本山彦の山、(企救の御堂とは蒲生の大興寺か)九百年も前から靈験あらたかなお山ということが、庶民のあいだで歌われていたことは大したものではありませんか。

◎人生のうち極めて重要な約束をするとき、著名な神社や寺院から発行される牛玉宝印(ごおうほういん) (一種の護符)

の裏面にその誓いの文句を書いて、もし約束を破るようなことがあつたら神々の罰を受けます、という起請文(固い約束文)とすることがあります。天正十三年に彦山の牛玉宝印を使用して書かれた起請文(鍋島家文書)が佐賀県立図書館に所蔵されており、また天保八年に書かれた武術の免許皆伝に際しての起請文があり、(個人所有)箇条書きで、当流を他流に取り入れられないこと、他に教えたり見せたりしないこと、他流を非謗しないこと、日ごろの行いを正しくすることなどが書かれており、もしこれに背いたりしたらたくさん神々から罰を受けますということを書いてあります。

彦山の牛玉宝印を使用した起請文は、九州全域で南北朝時代から用いられていたようだという事です。牛玉宝印は玉と書いてなぜか「ごおうほういん」といいます。

訪探里ふる

文/水上薩摩

幕末の英彦山

広報そえだ四月号で、英彦山の勤皇の僧たちが小倉藩に捕らえられたことにふれましたが、その事件のいきさつをもう少し詳しくわしく述べさせていただきます。

文久三年（一八六三）十一月十日十二時、小倉城大手に部隊を編

成、大将は二木求馬、石火矢（大砲）三挺、人足二百五十余人、駄馬四十五匹、付属は組替二十人、左右旗奉行、後尾物頭など、威風堂々として出発。

十八日、座主院の大広間に入る。

座主院は一応の外交辞令の後、このたびの出張の目的を告げられる。

座主院は、このような騒ぎを起したことは小笠原殿に対し誠に申し訳ない、ただいまより山を下り小倉に出て罪のないことを申し上げると、その日の五ツというころから用意され駕籠に召され、五尺（約一・五メートル）も積もっている雪を踏み分けて家老坊・用人その他の役付きの者を召し連れ八つというころ山を出発された、大変なことであった。十九日はなお大雪降りで行き通う道さえ踏み迷うほどであったという。

彦山の罪人として二人の僧が送

られてきた。

二十二日朝、雪曇りようやく晴れた。農兵百人木部（金辺）峠に出迎え。座主院・奥方、奥女中七人・僧と士五十人を守護し小倉に出る。昨夜は香春に泊まったという。西小倉彦山屋敷へ入られた。

表向きは禁中の人なれば農兵をつけられてお守りするのだというが、哀れ召取人にて番兵をつけられたのである。

十二月三日朝、晴れ後曇り。彦山僧六十人ばかり小倉の牢につなぐ。

四日 彦山に出張の備えの武士たちは、豊前坊原にて筒払いもなぐ石火矢を取りくずして、郡夫を召し集め、これにかつがせて帰る。

この文は小笠原藩の藩士で佐野経彦（有名な国学者慶応二年の長州戦争について貴重な記録を残している）という人の「文元日記」

を読みやすくした文を参考にしたものです。

文中に「禁中の人」という言葉がありますが、これは後伏見天皇の第六皇子安仁親王と申される方が仏門に入られて、助有法親王と号され三井寺円満院主であられたが、後、難を避けられ九州に下向され（このころは後醍醐天皇が隠岐に流されたり、護良親王が吉野に挙兵されたり南北朝時代の始まる直前）宇都宮氏を頼って豊前国を巡錫されましたが、彦山霊山寺無量寿院に入御をお願いいたしました。時は元弘三年（一三三三）、親王二十三歳の御時でした。衆徒たちは相談して彦山よりもなお安全な地として、神領のうち筑前国黒川（現在の甘木市）に親皇の御館を造り黒川院としてここに御移り願ったのです。

（参考幕末秘史英彦山洵難録）